



JSSH NEWS

日手会ニュース

発行：一般社団法人日本手外科学会
広報・渉外委員会

第53回日本手外科学会 学術集会を振り返って

第53回日本手外科学会学術集会
会長 柴田 実
(新潟大学大学院形成・再建外科)

目 次

- 第53回日本手外科学会学術集会を振り返って
- 新特別会員ご挨拶
- JSSH-HKSSH Traveling Fellow 報告記
- ハンドギャラリー(生田コレクション1)
- 専門医バッジ作成について
- お知らせ
- 編集後記

第53回日本手外科学術集会を2010年4月15日から17日の3日間にわたって朱鷺メッセ新潟コンベンションセンターで開催させていただきました。

今回、学会テーマとして『手の機能と整容の両立』を取り上げ、これまでの2日間の会期を半日延ばして木曜から土曜日の昼までの2日半にわたり手外科学術集会を開催致しました。地方都市新潟での開催にもかかわらず、1700名余りの方々に参加して頂き、盛会裡に学会を進行、終了できました。

応募演題総数は過去で最も多く574題ありましたが75名のプログラム委員から厳正なる審査をいただき、この中からシンポジウム33題、パネルディスカッション34題、口演311題、e-poster 130題が採用となり、採択率は88%でした。

シンポジウムとパネルディスカッションをそれぞれ5セッションずつ企画致しました。いずれも日頃よく見かける内容を取り上げ、これまで討論されてきたものも含まれますが、範囲を絞って問題点を追求し、最前線の考え方を討議いただきました。

シンポジウム1の“遠位橈尺関節症に対する治療法の適応と問題点”に続いてSzabo先生(2010年ASSHアメリカ手外科学会会長)から、シンポジウム5の“手の機能と整容からみた先天異常手の手術”に続いてKay先生(2007年イギリス手外科会長)からそれぞれシンポジウムと同様のタイトルで招待講演をお願いし、欧米を代表して最前線の考え方を講演いただきました。

パネルセッションでもパネル1の“腱修復術後の運動療法”に引き続いてThomopoulos先生(ワシントン大学整形外科、Gelberman先生のスタッフPhD.)から招待講演として屈筋腱縫合後の治癒の課程・生理についてワシントン大学Gelberman先生のグループが行った実験結果に基づき、どうした術後運動療法が合理的なのかご講演いただきました。強い屈筋腱縫合が合理的であると結論された現在、屈筋腱縫合術の成績は術後運動療法が決め手であることは論を待たないので、パネル1では運動療法を出来るだけつぶさに検討していただくためにビデオパネルとしました。パネル3では“母指CM関節症の治療法と問題点”を討議し、このパネルに続いてGlickel先生(2008年アメリカ手外科学会会長)から招待講演とし

て欧米でスタンダード手術となっている大菱形骨摘出・靭帯再建法を中心に、母指CM関節症治療法の最新動向についてお話いただきました。このほかの招待講演ではPederson先生（Greenの手外科教科書編者）からは筋肉移植による手の機能再建を、Jiang先生（北京大学教授）にはギャップを設けたチューブによる神経接合法のお話を、そしてBrawn先生（ワシントン大学形成外科 Mackinnon 教授のスタッフ）には新しい末梢神経修復法のひとつとして確立した手技となった神経移行術についてご講演をいただきました。

また、第48回学術集会以来、手外科専門医制度の確立が学術集会のテーマにたびたび取り上げられて来ましたが、今年は手外科専門医制度発足後3年になりますので、手外科研修制度の充実を進めるために、今回パネル2で手外科フェロー制度の導入について検討していただきました。

招待講演として評論家の立花 隆先生には「突然 手の機能を失う恐怖体験を二度も重ねて考えたこと」と題して自らの体験談として手の機能の重要性にまつわる話をしていただきました。

また、新潟手の外科同門の大先輩である吉津孝衛先生には「伸筋腱剥離術」と題して、手外科の手術で最も難しい手術のお話をお願いしましたが、素晴らしい反響で会場は入りきれない状態となり、本会で最も評価の高いご講演の一つとなりました。

シンポジウム、パネル、招待講演いずれも、長年興味を抱いてきた内容を取り上げ、多くの皆さまに喜んでもらえる内容を網羅できるように企画いたしました。発表時間が重ならざるを得ないものがあり、全部を聞いていただけなかったのは心残りですが、明日への診療に役立つ情報をいくつか得ていただいたとしたら、集会企画者としてこれ以上の喜びありません。

今回より手外科学会の新しい事業の一つとして世界の手外科学会の中から Guest Society をお招きすることになり、第53回日本手外科学会学術総会には Australian Society を招待致しました。Tonkin先生（2007-2010国際手の外科 Secretary General、2007-2008 オーストラリア手外科学会会長）からは招待講演の他に二つの教育講演をしていただきましたが、残念ながら一般演題への応募は少なく、今後、この試みを成果あるものにするには邦人の日本語発表を同時英訳するなどの工夫が不可欠と感じました。

17日土曜は朝から春期教育研修会も平行して開催されましたが、2日半に渡る学会は正午前に滞り無く終了し、一般口演の中から査読評価高得点論文3編（基礎論文2編、臨床1編）を会長賞として表彰しました。その後、閉会式を行って次期第54回日本手外科学会学術集会会長の藤 哲先生に Milford の Hammer と学会長メダルを手渡して第53回会長の任務を終了いたしました。来年の学会が素晴らしい会となりますよう祈念するとともに、また青森市で会員の皆様に再会できることを楽しみにしております。

本学術集会開催にあたって新潟大学形成外科の医局員、新潟大学整形外科手の外科班、新潟手の外科研究所の皆さんには献身的なご援助をいただきました。

最後に、第53回日本手外科学会学術集会に対する会員の皆さまによるご支援を心よりお礼申し上げます。



新特別会員ご挨拶

医療法人社団 創進会 みつわ台総合病院

浜田良機

—私の手外科医への略歴—



2010年4月に新潟市で開催された第53回日本手外科学会で、特別会員にご推挙、ご承認頂きありがとうございました。現在は、医療法人社団 創進会みつわ台総合病院の院長を務めておりますが、院長としての仕事と共に、5名の若い整形外科医とともに、脊椎疾患、関節疾患、手の疾患さらには外傷など、全ての整形外科疾患・外傷に対する診療に力を注ぐ毎日を送っております。

さて、私が手外科を集中して勉強したのは、1980年からのフロリダ留学中でした。フロリダ大学への当初の留学目的は、1年の予定で、Eneking教授が提唱されたsurgical staging systemに基づいたsurgical margineの概念を理解し、それに基づいた骨・軟部腫瘍の治療法を学ぶことでした。しかし1年の留学が終わろうとしているときに、赤松先生(初代山梨大学医学部整形外科教授)よりの1通の手紙で、1年間フロリダ大学で手外科を勉強することになりました。このときには、聖マリアンナ医大整形外科の講師休職の身分でしたので、故三好教授からさらに1年間の留学期間延長をご許可を頂いたことには、今でも大変感謝致しております。2年目はPaul C. Dell教授が責任者を務める手外科グループに所属して、動物や屍体標本を利用しての、術野の展開、神経、腱、血管縫合の訓練とともに、外来診療、手術の助手として臨床を経験させていただきました。Dell先生のご厚意で、時には術者も経験させていただきました。このように振り返ってみますと、多くの人々からの援助があってこそ、名誉教授、手外科学会の特別会員の称号などを頂ける今の状態に身を置くことができたと思っております。多くの人々のお力添えがあることを忘れず、謙虚に感謝の気持ちを持ち続けることが、仕事も含めた人生の幸せのためには、極めて大切であることを最近、特に強く感じております。

さて、留学から帰国して、1983年に山梨医科大学整形外科学教室に赴任、手外科診療を開始しました。しかし、そこには蓄積された症例もなく、なんの実績もない状態の山梨医科大学整形外科学の手外科をアピールするには、どのようにすべきかをまず考えました。他の施設と同じような手術を行っても症例の蓄積にはかなりの時間が必要です。さらにどこまで独自性がアピールできるかわかりません。そこで考えたのは、比較的症例が多い疾患で、他の施設では、あまり行っていない治療法を試みることでした。その疾患として、手根管症候群に着目、臨床症状から病勢の進行程度を3段階に分類し、grade 1、2の症例に対しては、装具療法を中心とした保存療法を積極的に行い、関東震災会、中部震災会、手外科学会などにその結果を発表することで、徐々に山梨大学の手の外科グループも注目されるようになりました。数年後には、手外科医として、私の名前を、多くの先生方に覚えて頂けるようになりましたが、これも多くの先生方のご援助や、教室で共に手外科を研鑽した先生方のお陰と感謝致しております。

人が、それなりの人生を送るには、多くの人々のバックアップが必要です。自分ひとりの力で、成し遂げたと錯覚している方も少なくないようですが、それは大きな誤解です。また、若い頃には、自分の将来の夢からはどんどん外れてしまうような方向に人生を推し進めると思われる出来事ばかりが起こることがあります。その時に、それを自分の力で自分の望む方向に方向転換しようといろいろと努力しても、それは不可能で、まわりの人々には下手な小細工と思われるかもしれません。方向転換には同僚、友人、先輩のバックアップが必要です。その最低条件は、常に自分に対して謙虚で、かつ感謝の気持ちを持つことであると思っております。今後も私とともに仕事をしている病院の医師もふくめた職員の方々や、整形外科の先輩、後輩のバックアップに感謝しつつ、手外科専門医として、自分の診療技術の向上、後輩の指導とともに、学会の発展に寄与したいと思っております。今後ともどうかよろしくお願い致します。

新特別会員ご挨拶

医療法人 寺西報恩会長吉総合病院 病院長

梁 瀬 義 章



この度、伝統のあります日本手外科学会の特別会員に選出していただき、大変光栄に存じます。多くの特別会員の先生は手外科のみを専門にされて65歳をお迎えになっているのに、小生は手外科6割、脊椎外科や関節外科4割という生活をしてきており、未だに頸椎や腰椎の手術、人工関節の手術などもらせていただいています。純粋に手外科のみをらせていただいたのは、京都大学時代上羽先生のもとで手外科をご指導いただいたのと、近畿大学で田中清介教授のもとで手外科させていただいた時で、それ以外の病院では悪性腫瘍以外は能力範囲内で何でもらせていただいております。前期高齢者とな

った今も、現在の病院で3人の整形外科医と一緒に外来診療や手術をらせていただいております。

手外科は大学紛争が収まり、卒後6年目に大学に戻った時、上羽先生が手外科をなさっていたため、その教を請うことになりました。当時、手外科には藤川先生、小原先生、須藤先生などの先輩もおられ、一緒に勉強させていただきました。上羽先生のご紹介でN YのDr.Carrollの所へ留学させていただきました。また、奈良医大の玉井先生のところでも3週間マイクロの研修をさせていただきました。この他末梢神経は故伊藤鉄夫先生や故山本潔先生に指導させていただきました。しかし、不肖の弟子で何もものにできず、齢のみ重ねてしまいました。しかし、手外科を専攻させていただいてよかったのは、これまで大学の枠を超えて多くの先輩方や、同年代のhand surgeonの方々にご指導やご厚誼をいただいたことです。中でも新潟の田島先生が主催され、アメリカ東海岸の手外科センター6か所を訪問するツアーに参加させていただきましたごく刺激を受けました。委員会活動では、初めて日手会委員会の委員長をらせていただいたのが、国際委員会新設の時、honorary member 選出のby law を作成するのに、順天堂大学の山内先生に種々ご指導賜りました。役員としては、理事の際は生田理事長、中村理事長に、監事の際には三浪理事長に種々ご指導賜りました。ここで少し、話はそれますが、小生医者であるとともに浄土真宗の僧侶でもありますので(評議員会の席で十分に伝えることができませんでしたが)法事などで手外科医として話す手指のたとえを書かせていただきます。hang looseは元々、こんにちはとかアロハとかの意味のようですが、私はこれを用いて年忌などの時に簡単な法話をらせていただいております。「親指は他の4指の方を向っていますが、小指は他を向いている、“親の心子知らず”と味わいます。小指が私自身です。仏教では絶対者(佛;親指)は絶えずわれわれを救わずにはおられないとして、常に働きかけてくださっているのに、われわれ凡夫はそれに気付かず好き勝手なことしている。・云々)。これまで多くの先輩方などからいただいたご指導やご厚誼に気付かず、自分勝手な行動で多々ご迷惑をおかけしたのではないかと、hang loose を見ては反省と感謝の気持ちを持つ今日です。これまで私を育てていただき、またお付き合い下さいました多くの先生方に心から深謝いたします。合掌

JSSH-HKSSH Traveling Fellow報告記

独立行政法人国立病院機構

埼玉病院整形外科

森 澤 受

● はじめに

このたび平成22年度(第10回)JSSH-HKSSH Exchange Traveling Fellowに選出されました。今回が年齢的に最後の機会であったので選出して頂き、喜びもひとしおでした。このような貴重な経験を与えていただいた日本手外科学会および香港手外科医学会に対して心より御礼申し上げます。

日程は平成22年3月16日に出発し3月23日に帰国する8日間であり、内容は第23回香港手外科医学会への参加および演題発表、肘関節鏡、人工肘関節のCadaverを用いてのworkshopへの参加、live surgery見学、病院訪問などでした。

香港は3月中旬ではありましたが、日本よりあたたかく、上着着用ではやや暑かったです。

● 学会

Pamela Youde Nethersole Eastern Hospitalで2日間(金曜日、土曜日)にわたって行われました。今年のテーマは“Major trauma in the upper limb”でした。会場は1つなのですが、招待演者も含めた熱気あふれる活発な討論がかわされました。日本人は私1人でしたが、“重度屈筋腱損傷にたいするsilicon rodを用いた二段階屈筋腱再建術”について口演し、積極的にdiscussionにも参加しました。招聘講師は台湾からYuan-kun Tu先生、イスラエルからYaffe Batia先生をむかえ、興味ある口演をされていました。なかでもBatia先生の戦争に関連する外傷の話などはイスラエル、近隣のアラブ諸国での緊迫した状況、戦争による悲惨な状態などが伝わり、自分の周囲の環境とのギャップに驚き、改めて日本の平和のありがたさを痛感しました。

● Workshop

今回はCadaverを用いた、肘関節鏡と人工肘関節のworkshopでした。臨床で肘関節鏡視下手術をする機会もありますが、どうしても時間の制限があるので、今回はCadaver相手に思う存分練習させていただきました。肘関節鏡はベルギーからDr.Roger van Riet先生を招聘講師として2人で1体のCadaverで練習しました。人工肘関節は、同門の先輩である池上博泰先生(慶應義塾大学整形外科)が招聘講師として招かれていました。K-NOWに関しては私も多少の知識と経験を持ち合わせていましたので、参加者の先生方にK-NOWの特徴、従来の人工肘関節より優れている点などを説明することができました。

Cadaverを用いてのworkshopは日本では得られない経験であり非常に有意義で今後の臨床に役に立つと思いました。

また、香港の先生方はみな、非常に親切で日本のこともよくご存じでした。毎日夜はDinnerがあり、

非常に歓待していただきました。Ho先生には手術見学、奥様も交えてのdinnerに誘っていただきました。Yen先生（平成22年度日本香港Traveling Fellow）にも非常に仲良くしていただき、学会終了後の土曜日午後にマカオに半日旅行につれていってもらいました。後日、Yen先生が日本手外科学会の際に訪日された際には、1日、私の病院を見学していただきました。このように同世代の先生と親交を構築できたことも今回の貴重な収穫と考えています。

最後に今回フェローにご推薦いただいた慶應義塾大学整形外科 戸山芳昭教授、国立成育医療センター第二専門診療部 高山真一郎部長、日本手外科学会 三浪明男前理事長、選出いただいた日本手外科学会国際委員会担当 別府諸兄理事、池上博泰委員長、また、国際委員会委員の先生方に厚く御礼申し上げます。



ハンドギャラリー（生田コレクション1）

手は語る 孫の手

広島手の外科・微小外科研究所

生田 義和

9年前に広島大学を退官してから始めたことのひとつが絵筆を握ることであった。医者になって1年目、尾道農協病院に赴任して2、3枚描いたのち中絶し、実に44年ぶりであったので正しくは再び始めたわけである。この絵は歩き始めた初孫の手で、2004年の作品。小児の手の動きは本能的、というよりも反射的であると思える部分がある。すなわちこの右手は赤いバットを握っているように見えるが実は赤いバットが手掌を刺激してワルテンベルク指屈曲反射を起こしている。左手も大人の動作の「人指し動作」に似ているが実は全ての指の伸展の始まりの動作、と考えられないこともない。この時期は、いわゆる合目的な手指の運動と原始的な反射が混在している。したがって小児の手指の運動には人間の哲学的な意味、あるいは生物としてのヒトの発達過程が包含されている、と考える。ヒトは握ることにより自己(内なるもの)に目覚める、伸展することにより宇宙(外なるもの)を知る。握っているのは外界からの刺激によって伝えられる情報のインプットが出来ない、指の伸展は肩と肘に補われて体幹から遠く離れて外界と交信する。題して「Magonote Dextra & Magonote Sinistra」。

ところで、「孫の手」は身近な道具であり、かわいい孫が痒い背中を搔いてくれる、との情景が目につくが、じつはこの言葉は下の慶応義塾大学医学部の北里図書館の二階会議室に掲げてある福沢諭吉の贈医という七言絶句に使われている「麻姑(まこ)の手」に由来している。

「無限(むげん)の輪贏(しゅうえい) 天また人 医師 道(い)うを休(や)めよ自然(しぜん)の臣(しん)なりと 離妻(りろう)の明視(めいし)と麻姑(まこ)の手と 手段(しゅだん)の達(たつ)するの辺(へん)唯(た)だ是(こ)れ真(しん)なり」「医学というものは(天また人)自然と人間との限りない(輪贏まけかち)知恵くらべの記録のようなものである。医師よ、自分たちは自然の家来に過ぎないなどと言うてくれるな。離妻のようなすばらしい眼力と麻姑のような行きとどいた手をもって、あらゆる手段を尽くしてこそ初めてそこに医業の真諦が生まれるのである」(富田正夫博士の考証・福沢諭吉より。昭和61年)

麻姑(まこ)とは中国の仙女。西晋・東晋時代の葛洪の書『神仙伝』などに記述があり、その容姿は歳の頃18、19の若く美しい娘で、鳥のように長い爪をもっているという。蔡経という人が平民にも関わらず神人である麻姑の爪が鳥のように伸びているのを見ると、彼女に対して、「この爪で背中を搔いたら気持ちが良いだろう」と不遜にも考えた。この心を見抜いた王遠は蔡経を捕まえて怒った。このとき蔡経は背を鞭で打たれたが、鞭を打つ人の姿は見えなかったという。(Wikipediaより)

ただし私の絵の題は「麻姑(まこ)の手」ではなく、「孫の手」である。余談であるが、この絵は第51回日本手の外科学会(筑波)の折、手の写真展に出席して会長である落合直之先生より「会長賞」を頂いた、私にとっては思い出深い作品である。



日手会専門医バッジ作成について

平成19年に専門医制度が発足して以来、688名の日手会専門医が誕生しました。現在、広報・渉外委員会では、日手会専門医の証となるバッジの製作を行っております。日本の近代手外科の先駆者である、故田島達也 新潟大学名誉教授のメモリアルデザインをもとに、委員会にて検討を重ねて参りました。2011年中には専門医の先生方のお手元に届くものと考えております。

関連学会・研究会のお知らせ

◆第28回中部手外科研究会◆

会 期：平成23年1月29日（土）
会 場：小倉井筒屋 新館 パステルホール
会 長：酒井 和裕（社会医療法人財団 池友会 新小文字病院）
詳細は <http://28th-tegeka-kenkyukai.com/>

◆第32回九州手の外科研究会◆

会 期：平成23年2月5日（土）
会 場：大分県医師会館 7F
会 長：内田 和宏（大分循環器病院）
詳細は <http://www.jssh.gr.jp/khand/index32.html>

◆第25回東日本手外科研究会◆

会 期：平成23年2月25日（金）
会 場：東京ステーションコンファレンス
会 長：瀧川 宗一郎（昭和大学附属豊洲病院整形外科）
詳細は <http://ejssh25.umin.jp/>

◆第23回日本肘関節学会学術集会◆

会 期：平成23年2月26日（土）
会 場：東京ステーションコンファレンス
会 長：荻野 利彦（山形大学医学部整形外科）
詳細は <http://jes23.umin.jp/>

◆第5回日米手外科学会合同会議◆

会 期：平成23年3月26日（土）～29日（火）

会 場：アメリカ合衆国/ハワイ

名誉会長：中村 蓼吾（中日病院手の外科センター）

会 長：三浪 明男（北海道大学医学部整形外科）

詳細は <http://www.congre.co.jp/5jassh>

.....

◆第3回日米整形外科スポーツ医学会合同会議◆

会 期：平成23年3月26日（土）～29日（火）

会 場：アメリカ合衆国/ハワイ

会 長：藤 哲（弘前大学整形外科）

詳細は <http://www.congre.co.jp/3jaossm>

.....

◆第54回日本手外科学会学術集会◆

会 期：平成23年4月15日（金）・16日（土）

会 場：ホテル青森

会 長：藤 哲（弘前大学整形外科）

詳細は <http://www.jssh.umin.jp/54th/>

.....

◆日本手外科学会第17回春期教育研修会◆

会 期：平成23年4月17日（日）

会 場：ホテル青森

主 管：日本手外科学会教育研修委員会

編集後記

秋も深まり、朝晩冷え込むようになって参りました。一部のスキー場はすでにオープンし、冬の訪れが近いことを実感いたします。

私事ながら、広報・渉外委員を拝命し4年目になります。この間に事務局移転、専門医制度のスタート、日手会ニュースのペーパーレス化、学会法人化および「一般社団法人 日本手外科学会」への名称変更、評議員制から代議員制への移行、などなど大きな変化をいくつも体験し、本学会を取り巻く環境が急速に変わりつつあることを肌で感じております。そして今後は厚生労働省の定める「広告可能専門医」になることが目標になると思います。

広報・渉外委員会としては、ホームページの充実、会員管理および専門医単位管理システムのIT化、日手会ニュースの発行などにより、本学会がより発展するよう努力をしていく所存です。今後とも会員の皆様のご支援をよろしくお願い申し上げます。

(文責 佐藤和毅)

広報・渉外委員会

(担当理事：落合直之 アドバイザー：田中寿一、堀内行雄 委員長：島田幸造
委員：今谷潤也、小野浩史、佐藤和毅、白井久也、藤岡宏幸)